田永忠と沖新

建設産業図書館東日本建設業保証株式会社

江口知秀

門だったのだが、 中核を担うのが、河口に設けられた大水尾と排水樋津田永忠が合流させた。そして、児島湾への排水の い、地域の洪水排水機能を百間川へと集めるために、 も合わさる。このような小河川は沖新田の開発に伴 川幅も広がってきた。あと三㌔㍍ばかり進むと砂川 行われて 時の放水路だからか川幅はせまい。近代改修直前の グラウンドや公園などに活用されて 土堤に囲まれた田んぼと の荒り 転車で下流へと向かう。河川敷は広く、サッ は堤防の無い箇所が随所にあり、 内川を合流させるための水門が見え、 から百間川の河川敷をのんびり いうから、 まずは沖田神社へ向かう。 緊急時以外は川というよ いう感じだったのだろう。 いるが、 更に稲作が

の小祠に祀られているのだが。 敷に去った、 びれた神社なんだろう? 立派だ。思いのほか参拝者もいる。「どうせまた、さ 人柱となった「おきた姫」は本殿ではなく、 境内に入るとすぐに永忠の銅像があった。拝殿も 同行者を見返したい気分だ。とはいえ、 人柱のやつ」と言って倉 その裏

められていたらしいが、池田光政の代になると人口 岡山の新田開発は、 田畑が大いに不足する事態となり、 宇喜多秀家の頃には始 ます

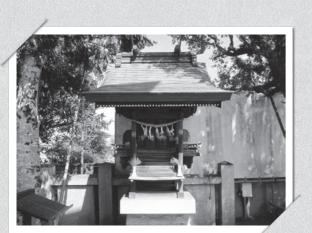
> 綱政に引き継がれ、 政は積極的な新田開発を奨励し、その遺志は息子の なければ藩が立ち行かなくなったのだ。そこで、 ます必要に迫られた。 ことになった。 必然的に実務は永忠が担当する 農家の次男三男に耕地を与え 光

すると、 の土地がおおよそ沖新田にあたる。 線が東西に走っているが、それを旭川の左岸から東 取りかかった。ちなみに沖新田の範囲を地図で説明 五四〇町歩という岡山藩空前規模の沖新田の開発に 島新田五六〇町歩。こう その範囲の国道二号線から南側、児島湾までの全て まずは延宝七(一六七九)年に完成した三〇〇町 百間川を越えて君津ジャンクションまでたどり、 岡山城の南五書がほどのところを国道二号 一歩。こうした実績を積み上げて、一つづいて貞享元 (一六八四) 年の辛

姫』にて想像をたくましくし、 ばならないが、罪人は不可で、 寛政十(一七九八)年刊行の『続近世畸人伝』による して人柱となり、 も勘定に入らない。 研究者の柴田一氏は、『沖新田・沖田神社と沖田 沖新田を開発するには人柱を竜宮に献じなけれ そうした大土木事業につきものが人柱だ 於幾多明神として祀られたという。 そこで、「きた」という女が志願 沖田姫は、 事故で海に落ちた者 しっかり

> 神社の場所などと、色々と推理をしている。 沖田神社から百間川沿いを一*よどほど南下者の津田家の奥女中であり、彼女が入水し 一世がほど南下した古宮、彼女が入水した場所は

が事実はいかがだろうか。して場所を動かさなかったのは、 願が出ていたにも関わらず、 社の前鎮座地であり、 宝永六 高潮などで浸水するので移転 (一七〇九) 年以前の沖田 永忠が存命の頃は頑と そのためだと



沖田神社本殿の裏にある「おきた姫神社」 [交通] 岡山駅前から自転車で約1時間